

(続紙 1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	西島 薫
論文題目	西部カリマンタンにおけるウルアイ王権とその歴史的変容		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、ウルアイと呼ばれるダヤック人の在来王権と、それが20世紀初頭以降のインドネシア・西部カリマンタンにおける地方政治とどのように関わり、どのように変容してきたかに関する研究であり、著者は、2014年9月から2016年月3月までの19箇月間と2017年8月におこなったフィールド調査及び文献調査から得られたデータに基づいて論述を展開している。</p> <p>序章では、現代インドネシアの地方政治に関する先行研究を検討し、本論文の問題設定をおこなっている。インドネシアの地方政治研究は、地方の政治エリートの活動、パトロン・クライアント関係、慣習法 (アダット) の復興に焦点を合わせてきたが、これらの研究はいずれも、ウルアイ王権のような在来政体に変化する地方政治の状況に適応しながら存続し、影響力を保ちつづけてきたことに十分な注意を払ってこなかった。こうした研究の現状を踏まえ、著者は、ウルアイ王権を西部カリマンタンにおける政治状況の変遷と関連づけて研究をおこなうことの学術的な意義について論じている。</p> <p>第1章ではウルアイ王を介して村落部に居住するダヤック人にアクセスし、その政治的利用を図ろうとする、西部カリマンタンの都市部に居住するダヤック人エリートの歴史的な形成過程を明らかにしている。その淵源は20世紀初頭からのカトリックの布教と教育である。カトリック系の学校で教育を受けたダヤック人首長の子どもたちは、都市部に移住し、社会的上昇を遂げることで、村落社会から切り離され、かつ乖離したダヤック人のエリート層を形成していった。</p> <p>第2章では、オーストロネシア諸族の在来王権との比較を念頭におきながら、ウルアイ王が実施する神器祭祀やウルアイ王と村落社会との関係を記述することで、次の諸点を明らかにしている。ウルアイ王権は、人々に豊穡と安寧をもたらす生命の源としての神器の祭祀、神器祭祀者としての王、僅かな数の側近から成っているだけであり、統治的に機能する社会組織や軍隊のような暴力装置をもたない。また村落の土地に対する権利と表裏一体の関係にある親族組織とも無縁である。そのため、ウルアイ王権は領地をもたないだけでなく、政治的にも無力に近い。だが、その結果として変化する政治状況に適応できる大きな潜在的可能性をもっている。</p> <p>第3章では、口頭伝承と文書資料を丹念に織り合わせることで、太平洋戦争終了後の荒廃した状況から、独立期、スカルノ政権期、スハルト政権期、その後の民主化と地方分権化の時代において、ウルアイ王が西部カリマンタンの変化する政治状況やダ</p>			

ヤック人エリートの政治活動に応答するなかで巧みに立ち回り、病気を治癒し、豊穡をもたらす呪術者、周縁化されたダヤック人の象徴、慣習法（アダット）の守護者、さらにはダヤック人の王として、村落部に居住するダヤック人たちの前に姿を現してきた変遷の過程を歴史的視点から詳細に描き出している。

最終章では1～3章における記述と分析を要約するとともに、序章で検討した先行研究に立ち返り、本論文の学術的意義についてのべている。すなわち、ウルアイ王権の変化する政治状況に対する柔軟性と適応力は、それが村落の土地に対する権利と表裏一体の関係にある親族組織とは別の相で成立していることに由来するが、こうした政体と親族を区別する視点が先行研究には欠けていたことや、こうした区別をおこなうことから開ける研究の展望が論じられている。

(論文審査の結果の要旨)

インドネシアの地方政治に関する研究の多くは、地方の政治エリートの動向、パトロン・クライアント関係、慣習法（アダット）の復興に焦点を合わせておこなわれてきた。そこに大きく欠けていたのは、激動する時代状況に適応しながら存続してきた王や首長を中心とする在来政体の仕組みと、それが現代インドネシアの地方政治と関係しあう局面への研究関心である。本論文は、インドネシア・西部カリマンタンのダヤック人の在来政体であるウルアイ王権を、それを取り巻く政治状況とともに描き出すことで上記のような先行研究の問題点を乗り越えようとする試みである。

本論文は以下の諸点において学術的に高く評価できる。

その第1点は、これまでほとんど研究がなされてこなかったウルアイ王権を研究の対象としたことである。それゆえ、本論文で提示される、著者自身のフィールド調査から得られた資料は貴重である。本論文では、この資料に基づき、人々に豊穡と安寧をもたらす神器の祭祀をおこなうだけで、統治的に機能する社会組織や軍隊のような暴力装置をもたないウルアイ王権と、政治的自律性が高く、親族的に構成されている村落が並存してきた状況に着目しながら、ウルアイ王権の仕組みを詳細に記述、分析している。

第2点は、ウルアイ王権を他のオーストロネシア諸族の在来政体と比較する視点から研究をおこなったことである。すなわち、ウルアイ王権が原初的な兄弟姉妹による近親相姦、こうした兄弟姉妹に由来する神器、権力をもたない先住者の王、先住者に婿入りする外来王など、オーストロネシア諸族の在来政体に広く見られる要素から構成されていることを指摘するとともに、西部カリマンタンの在来王権が関わっていた交易等の経済活動の歴史やその生態学的背景を描き出すことで、ウルアイ王権を広範な比較研究のパースペクティブのなかに位置づけている。

第3点は、ウルアイ王権が親族組織ではないことを明らかにしていることである。ダヤック人を含むオーストロネシア諸族の在来政体は親族関係を表現するのと同じ語彙で語られる。そのため、在来政体は親族組織と一体のものに見なされ、実際そのように論じられてきた。本論文で著者は、系譜関係、儀礼のサイクル、口頭伝承等を丹念に検討することで、ウルアイ王権が村落の土地に対する権利と一体的に構成されている親族組織とは異なる原理に基づくものであることを明らかにしたうえで、それが変化する政治状況に適応する大きな可能性をもっていることを説得的に論じている。

第4点は、口頭伝承と文書資料を丹念に織り合わせることで、太平洋戦争終了後の荒廃した状況から、独立期、スカルノ政権期、スハルト政権期、その後の民主化と地方分権化の時代といった、それぞれの時代状況やそのなかで展開されるダヤック人エリートの活動と呼応しつつ、ウルアイ王が病気を治癒し、豊穡をもたらす呪術者、周縁化されたダヤック人の象徴、慣習法の守護者、さらにはダヤック人の王としてふるまうように

なる変遷の過程を詳細に記述しており、歴史研究としても貴重な内容になっていることである。

第5点は、ダヤック人エリートと村落部に居住するダヤック人の間で、巧みに立ち回るウルアイ王の姿を鮮やかに描き出すとともに、それとあわせて、こうしたウルアイ王のふるまいを可能にしている王権の基本的な仕組みを論じていることである。この点で本論文は、在来政体に適切な位置づけを与えた現代インドネシアの地方政治研究になりえている。

以上の諸点から、本論文は、地域の生態、社会、歴史の総合的理解をめざす本研究科の研究成果としてふさわしい内容を備えた優れた論文であると判断できる。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成30年2月1日、論文内容とそれに関連した事項について試問をおこなった結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。